

月刊 民ぱく 2月号

2024



特集

となりの魔女

巻頭エッセイ 梨木 香歩

個人の確立と「ほどほどの魔女」

なしき かほ
梨木 香歩 作家

プロフィール
1959年生まれ。作家。作品に『西の魔女が死んだ 梨木香歩作品集』『裏庭』『家守綺譚』『春になったら莓を摘みに』『やがて落ちてくる光の』（以上、新潮社）、『僕は、そして僕たちはどう生きるか』『海うそ』『ほんとうのリーダーのみつけかた』（以上、岩波書店）、『崖辺のヤービ』（福音館書店）など。最新エッセイは『歌わないキビタキ——山庭の自然誌』（毎日新聞出版）。

十 代の頃——もう五十年近くも前になる——、科学的な説明や、論理的合理的な思考方法では、森羅万象、すべては説明しきれない、と気宇壮大な心持ちで、魔術など神秘的と目されている世界の理に興味を持った（今、失ったというわけではない。当時から続く問題意識なのだ）。

黄金の夜明け団、薔薇十字団、カバラ、生命の木、等々の単語の放つ響きは、耳に入るなりその時代の気分を懐かしく蘇らせる。異端審問関係の文献も、目につけば手に取るなどしているうち、魔女狩りという現象に眉を顰めた。例外はあるにしても、結局のところ狩る側の根本にミソジニーがあったのだろう、周囲（たとえ町内レベルだろうが）に影響力を持つ女性に対する。そして土着的な宗教への牽制、当時の堅固な教会組織からすれば明らかに都合の悪い「権威」に育ちそうな芽を、徹底的に潰したいという、これも本能的な衝動があったのだろうか、と思った。

中世ドイツの女子修道院長、ヒルデガルト・フォン・ビンゲンは幼い頃から幻視体験があり、葉草に詳しく、それに関する大著をものしてドイツ葉草学の祖とされている。のみならず医療を含めあらゆる分野に通じていた。キリスト教神秘主義の流れに在ったこの資質

でもって、貧しい農家に生まれていれば、おそらく「魔女」の誘いを受けただろう。だが貴族の生まれで親類縁者に教会有力者がいた彼女は、いうならば、守られていた。聖女にまでなった。魔女として犠牲になった多くの女性にも、もしかしたら彼女のように道を究める可能性があっただろうに。

その頃、何で読んだか今では原典もおぼつかないが、意識がある種の高みにまで達するための修行の一つとして、自分が年来大切に育てていた花壇を、外から侵入してきた野良犬等が荒らししても、穏やかさを保ったまま、静かに（お茶を飲みながら？）その様子を見ていられるようになる、というものがあつた。つまり何に対しても執着を持たない訓練か。あ、これは無理、と瞬時に悟った。ほとんど涅槃の境地ではないか。魔術師（魔女）を目指しての修行の一つだったように思うが、そんなことができるようになれば、なるほど術の一つくらい自在にできるかもしれない。だがそれは私ではない。しかし、もっと基礎的な魔女修行なら、付和雷同しない個人を確立するためには有益かもしれないと思つた。

目指すはほどほどの魔女、という辺りに焦点を定め、十代の終わり。

月刊
みんぱく
2024年 2月号

表紙
年に8回ある魔女の祝祭のうち、2月1日のインボルクに向けた祭壇。編集室にて作成

*本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

- 1 巻頭エッセイ
個人の確立と「ほどほどの魔女」
梨木 香歩
特集 となりの魔女
- 2 物語の外で魔女に会った
河西 瑛里子
- 4 魔女さんについて聞いてみた！
- 6 メディアのなかの「魔女」たち
橋迫 瑞穂
- 7 近世サバトの乱行絵巻
黒川 正剛
- 9 魔女たちは埒の内外に
吉岡 乾
- 10 バリ島のランダは魔女で女神
吉田 ゆか子
- 12 みんなく回覧板

- 14 推しコレ図鑑
マダガスカルのお呪具ムハラ
飯田 卓
- 16 もっと、みんなく
チルボン王国の聖人にまつわる人形芝居
福岡 正太
- 17 世界の「乗っちゃえ！」
港町ラバウルの路線バス
深田 淳太郎
- 18 だって調査だもの
出逢いは、いつも交通事故から
櫻間 瑞希
- 20 ぱくっ！とフィルめし
お腹も心も満たすポルデ
山野 香織
- 21 今月号の地図・編集後記

特集

となりの魔女

魔女と聞くと、どんなイメージを思い浮かべるだろうか。

小さいころに読み聞かせてもらった絵本の世界？好きなアニメのキャラクターの誰か？ハリー・ポッター？中世のヨーロッパ？それとも美魔女？

仏教の世界では魔女とよばれる人心をまどわす魔の存在があったが、魔女は明治時代、西洋の物語にあらわれるドイツ語のHexeや英語のWitchの訳語として日本に登場した。

箒に黒ネコ、大鍋でぐつぐつ、願いを叶える呪文、とんがり帽子といったイメージはここに由来するかもしれない。その後、不思議な力をもつ人へと意味を広げ、いつしか邪悪さ激減、キュートな少女たちに接近。なんだか、ちょっとワクワクしてきた。今回の特集では、現代に活躍する魔女、占い雑誌の魔女、キリスト教世界の元祖魔女、カラコルム山脈やバリ島の魔女を取り上げ、そのワクワクに迫りたい。

もちろん、魔女関連のお店の皆さんの声も聞こう。ほら、魔女はすぐそばに……。

物語の外で

魔女に会った

河西瑛里子 民博助教

物語に感化され、魔女になりたいと思っていたのは十代のころだったが、魔女として活動している人たちが本当にいると知ったのは、二十代に入ってからだ。大学院の授業で見た、その映像のなかで、カナダやアメリカ、そしてイギリスで、魔女を名乗り、女神を奉ずる人びとは、杖の先から光線が出たり、空を飛んだりする

ような魔法はつかっていないが、自然に親しみ、精神的だが丁寧日々を暮らしている、という印象をもった。数カ月後には、箒ではなく、飛行機に乗り、イギリスに向かう。そして、そこには、けっこうな数の魔女たちが暮らし

魔女イベントで販売されている魔女手作りのおまじないキット(癒し用)(ロンドン、2023年)



右:郊外の森で開かれた夏至の儀式で設置された祭壇(ロンドン、2017年)
左:かつてアメリカ村にあった魔女雑貨店(大阪市、2017年)

ていることを知った。なんと、男性も魔女(witch)と名乗っていた。

現代の欧米の魔女たちの多くは、キリスト教で否定されてきた自然や女性性を賛美する、という。確かに、環境保護意識は高め。女神と男神を祀るが、女神重視。自宅に祭壇をもつ人も多く、例えば、この女神と男神のほか、四要素(風火水地)を示す物を、対応する四方向(東南西北)に置き、魔女の象徴である五芒星(一筆書きの星)が描かれた何かを載せている。

夏至や冬至など、季節を祝う儀式は年八回一人、あるいは少人数のグループでおこなうほか、誰でも参加できる儀式も各地で開かれている。魔女関連の講演やワークショップ、グッズ販売から成るイベントも開催されている。占いに関心をもち、生計手段としても情報得られるが、儀式のやり方やハーブの使い方方を解説した書籍もよく見かけ、一部は日本語にも翻訳されている。

そう、日本にも欧米の魔女たちが創り出した信仰あるいは生き方はすでに輸入されている。日本の魔女たちはSNSのなかによく見つかる。宗教と意識しない人も多く、儀式や祭壇には日本の植物を利用するなど、



某魔女イベント(ロンドン、2005年)

日本になじむ形で取り入れているようだ。

魔女は邪悪、というイメージが浸透しているキリスト教圏では、「魔女」と名乗ることには、そこそこの覚悟が必要と聞かすが、日本でもそれなりの勇氣はいるらしい。というのも、物語の魔女への憧れをこじらせた人、と見られがちだからだ。

そろそろ勇氣を出して、身近なところから魔女修行を再開しようか、と夏になるたびに枯らしてしまう庭のハーブを見やりつつ、悩んでしまう。



ケッセル・ホン・ファウルペルツさん

魔女のコッペンバ(埼玉県さいたま市)

「薬缶やかんから生まれたものぐさ魔女」という意味で考えた名前です。

ハーブ園に勤務していたとき、魔女はハーブを使って人びとの病気を治していたことを知り、「病気は治せないけれど、美味しいものを作ったら周りの人をシアワセにしてあげられるのではないか？」という思いから魔女となる決心をし、ベーカリーカフェを始めました。畑で育てたハーブから薬膳茶を作ったり、10月には「ハロウィンランチ」と題し、怪しいメニューを提供したりしています。



お店のドアホン

魔女は昔話では悪い役で登場するので、「悪い人」のイメージが強いようですね。実際、怖がって店に入れなかったり、魔女の恰好かっこうをしたわたしを見ると固まってしまうお子さんこどももいます。



マハさん

魔女の厨房 CAULDRON(大阪府大阪市)

わたしは魔女を特別な存在と考えてはいないので、魔女として特別な活動はしていません。祈りも儀式もすべて日常のもの。「生きることは食べること」を標語として、お店では人里と山の境界を守るために駆除された猪や鹿をメインに提供しています。魔女とはその場所に「暮らす」人びととともに歩み、時として力を貸す存在だと考えています。わたしにとって料理は「生命の魔法の実践」ですね。アニメや漫画の影響は大きいですが、魔女という存在に興味も関心もまったくない人もいます。お客さんからの「魔女って何なの？」の質問に答えていたことで、初めて会った人から「〇〇さんが言った魔女さんですね？」とよく話しかけられます。



儀式道具

魔女さんについて聞いてみました!

日本各地で魔女関連のお店を開いている
なぜ魔女関連のお店を始めたの? 魔女

皆さんの、日々の活動を覗いてみましょう。
って何? 魔女として苦労したことは?



いいじま とよこ
飯島都陽子さん

グリーンサム(神奈川県横浜市)

子どものころから魔女は好きで興味があり、イラストの仕事でヨーロッパに行った際、魔女とハーブの関係を知り、なぜか納店の店を開業しました。魔女ではありませんが、魔女についての活動はしています。

日本で「魔女」というと、グリム物語などイメージ、あるいは漫画や「魔女の宅急便」の世界で自由に何でもできる人というイメージです。ですがわたしは、自然を深く観察し得た賢い存在が「魔女」だと考えています。な人は魔女的ではないと思います。

※表紙の祭壇のスクーフは飯島さんがデザインしたものです。



みつねこ
蜜猫さん

黒猫魔術店、Green Witch フクロウのかまど(山形県鶴岡市)

イギリスの魔女の生き方に感銘を受け、それを日本にも広めたいと思い、魔術道具専門店をオープン。2023年には、魔女の暮らしを体験できるアトリエ&カフェも始めました。山形県の田舎で自然とともに生き、畑仕事をしながら、儀式で使う魔術道具、油絵、お菓子などを作っています。製作したものに「魔法がかかっているね」「効果があるね」と言われると嬉しいです。

わたしが思うに「魔女」とは、自然とともに生き、季節や一日の周期によって「生かされている」ことを感じられる人。それを理解し、

知識と経験をあわせて、日々の暮らし

しを実践する人。「そのように生きたい」と思う人が「魔女」を実践すればいいのだと思います。



畑のハーブ(ヨーロッパの魔女たちは、野菜もハーブとして使います)



あんじゅさん

ENCHANTÉ Herbal Café(東京都狛江市)

子どものころからカフェを開くのが夢で、ハーブや料理の学校に通い、占いも学んでおりました。そんななか、「魔女」について学ぶ機会があり、魔女の思想が自分の求める生き方とほぼ同じだと気がついたのです。人が心身を健やかに保つためには、万物に流れる波動を調和させることが大切です。そのため、食や占いを用いてみなさんが自分らしく生きるお手伝いをしております。

「魔女」は西洋的と思われがちですが、日本にも「魔女」に近い存在がいたと思っています。宇宙と自然の理を理解し、万物と繋がりが共鳴して生きていくことを実践し、広めていく存在として、年齢制限も性別もなく、誰もが「魔女」の要素をもっていると考えております。



サーウィン祭壇

メデイアのなかの「魔女」たち

橋迫 瑞穂 はしきこ みずほ
大阪公立大学 研究員



『My Birthday』創刊号(実業之日本社、1979年)



『トワイライトゾーン』1984年4月号(ワールドフォトプレス)

ライトゾーン(ワールドフォトプレス、一九八三年一月号)一九八九年二月号)は、魔女を退魔的でエロティックな存在として示してきた。その背景には、この二誌のおもな読者層が男性であったことが関係している。しかし、後には近代魔術の実践者を紹介したり、海外の現代に生きる魔女を取り上げたりするようになった。さらに、二〇〇〇年代後半ごろから、日本で魔女として活躍する人が、魔女とフェミニズムを結び付けて紹介している。

二〇二〇年代以降に魔女を名乗る人があられわれ、SNSをとおして活発に活動し現代社会に溶け込んでいる状況は、見てきたように雑誌というメディアと魔女の不可分な関係性の延長にあると考えられる。ただし、二〇二〇年に入るとSNSの特性によってより個性豊かな魔女が活躍するようになったという違いも指摘される。他方で、雑誌のなかの魔女像はしばしば女性をエンパワメントしながらも、ときに「女性らしさ」というジェンダーバイアスを強化してきたが、SNSにおける魔女もそうした特徴を備えていることが垣間見られるのである。



当時のピラ「1555年10月、テレンブルクにおける魔女の火刑」
出典: Robert Muchembled, *Diable!* (Seuil/Arte Éditions, 2002)

近世サバトの乱行絵巻

黒川 正剛 くろかわ まさたけ
太成学院大学 教授

現代のアニメや映画に登場する魔女イメージの源流は、中世末から近世にかけて西洋で猛威をふるった魔女狩りで標的となった魔女のイメージにある。当時、魔女は、隣近所に住む人間だが、悪

魔の手下となり、キリスト教世界の転覆をもくろむ邪悪な存在として認識されていた。突然襲いかかる家族や家畜の病や死、大嵐や電撃による穀物の大被害は、魔女が悪魔の力を借りておこなう害悪魔術のためだと考えられた。魔女は害悪魔術で男性を不能、女性を不妊にし、ひと睨みで相手に損害を与える邪視をもつともいわれた。このような悪行は、魔女が集団で定期的集まる夜宴サバトで悪魔に報告されると信じられていた。サバトは、魔女イメージの歴史の核心にある。

魔女狩りが頻発していた一七世紀初頭、フランスのポルドー高等法院の裁判官ピエール・ド・ランクルが出版した『墮天使および悪魔の無節操のタブロー』(一六一三年版)には、サバトの図版が掲載されている。彼は一六〇九年にフランス・バスク地方で自ら魔女狩りをおこない、その経験をもとにこの



右: 占いフェス(原宿、2017年)
左: 魔女っ子サバス(渋谷、2013年)



日本では八〇年代より魔女は雑誌を中心に取り上げられ、その歴史や様態だけでなく、魔術を実践する手順などが紹介されてきた。例えば、女子中高生向けの占い・おまじない雑誌『My Birthday』(実業之日本社、一九七九年五月号)「休刊」は、周囲から愛される「魔女」を読者に提示して、

その理想像に近づくための方法として占いとおまじないの手順を紹介してきた。それに対して、オカルト専門誌『ムー』(学習研究社、一九七九年一月号)や『トワイ

書を著した。《魔女のサバトの描写図》と題された図版を眺めてみよう。

右上に描かれた三つの豪華な椅子の中央に座るのは五本角の雄山羊姿の魔王である。サバトの主催者だ。両隣に座る魔女は、魔王お気に入りサバトの女王と愛妾である。その前で素裸の魔女が悪魔と一緒に赤ん坊を生贄として魔王に捧げ悪魔を崇拜している。魔女と悪魔が正面背面交互に手をつないで踊り、テーブルを囲んで宴が催されている。大皿に盛り込まれた赤ん坊の死肉を魔女と悪魔が美味しそうに頬張っている。そして、大鍋に蛙、蛇など得体のしれないものを入れ、軟膏を作る二人の魔女。この軟膏を箒に塗ると空中飛行できるのだ。天空に吹き上がる煙は天候魔術を起こす。裸体の魔女が多いのは、悪魔や近親との乱交がおこなわれるからである。音楽が奏でられるなか展開されているのは、魔女と悪魔のおぞましい乱行絵巻なのだ。

このような魔女の行為が現実におこなわれたわけではない。これらの魔女イメージは、当時の人びとの現実と想像が混融する心性から生み出されたものだ。そのイメージの痕跡は、現在の魔女イメージにも明瞭である。

魔女たちは埒(か)の内外に

パキスタン北部、カラコラム山脈辺りの幾つかの谷で話されているブルシヤスキー語でピラスとよばれる存在は、多く魔女(魔女:Hexe[独語]、ヒキ[ウルドゥー語])と訳される。さまざまな物語から情報を繋ぎ合わせると、ピラスの他にプト(鬼)、ジン(男妖)、パリ(女妖)といった超常存在があり、これらをすべてひっくるめてまたピラス類とよぶ。ピラスは魔女であり、多様な魔物の代表である。

鳥山石燕に始まり、水木しげるや、最近では京極夏彦、あるいは目的は違えど柳田國男といった担い手が温めてきている埒(か)の伝承存在は、日本では妖怪とよばれる。同じように、ピラスに代表される上述の存在群を「妖怪」と名付けても良いだろう。しかしパキスタンの山中の妖怪譚には、それを秩序化して標本化する者がこれまで目立って居ない。数々の物語のなかで、奔放に生きている。それはもう、ピラスだパリだという名付けすら超えて。

Jean Ziaranko作《魔女のサバトの描写図》1613年
(ピエール・ド・ランクル著『墮天使および悪魔の無節操のタブロー』より)
出典: Deanna Petherbridge, *Witches & Wicked Bodies*
(National Galleries of Scotland in association with the British Museum, 2013)



吉岡 乾

民博准教授

ピラスらが登場する話は、空想物語ではない。ブルシヤスキー語話者(ブルシヨ人)の文化圏では、お伽噺(おとぎばなし)と歴史物語とのあいだに明確な線引きができず、妖怪はいつだって人の生活のすぐ隣に息衝いている。ヒトとして生まれ、谷の村々のなかで生活をする「内の妖怪」だっている。火から生まれ、山や氷河といった別世界に暮らす「外の妖怪」と異なり、「内の妖怪」は普段は人として身を潜め、就寝中に精神だけで別世界の魔女集会へ出向く。

彼らの社会にはシャマン(巫術師)があり、魔女を見て恐怖に憑かれた者を癒やしたり、妖怪を見破って封印したりする。そのシャマンも、パリやピラスの乳を飲むことで能力を開花させる。妖怪は普通、目に見えない。それを見ることができるのはシャマンくらいだ。

けれども一般人も稀に、電光石火の魔女メエルグスをちらりと目撃することがある。人が一〇〇日で行く旅程を一時間で駆け抜けるこの魔女は、滝を駆け下り、あるいは流れ星に乗って、山から人里へと害をなしに現れるその瞬間を発見される。口から火を噴き、緒髪(おひげ)に長身、裸の醜女であるメエルグスの夫は、イギリス人の服装と帽子、杖をもったヒルピラス(男魔女)。同じようにイギリス人の装いで、額の中央に目をもつダブラタスという人喰いの魔女もまた別にいる。ブルシヨ人の認識するこの世界は、自分たちの暮らす領域と、山や氷河、そして妖怪(イギリス人を含む)という、「じゃない方」の領域とから成っているのである。



上: ラカポシ峰から谷へ、メエルグスが駆け下りたか(パキスタン フンザ谷、2008年)
下: プアルタル氷河に、人の気配はもろちんない(パキスタン ナゲル谷、2009年)

バリ島のランダは 魔女で女神

よしだ
吉田 ゆか子

東京外国語大学 准教授

インドネシアのバリ島で、魔女といえはランダであろう。バリに魔女という概念があるわけではないが、外国人研究者は初期からランダを魔女(Witch)とよんできたし、わたしも授業等ではそう説明する。しかし、若干の違和感もある。目を見開き、長い舌、大きな乳が垂れ、ぼさぼさの長い髪と爪をもつこの黒魔術の使い手は、しかし、怖い、魔術で災いをおこす、世のつまはじき者といったいわゆる魔女のイメージに収まりきらない。では、ランダとは何か。

それを理解するためには、対になっていく聖獣バロンも知る必要がある。バロンは、四つ足で大きな尻尾をもつ、獅子のような獣である。こちらも見開いた目で、顎髭があり、通常は赤い顔をしている。

バリの世界観では、善と悪で世界が成り立っている。そして右、上、男、山が善とされ、表現される一方で、人びとが称え、祈る対象でもある。バリのヒンドゥー教寺院にはバロンとランダ両方の仮面を祀っているところがある。バロンはシワ神の、ランダはその妻ドゥルガ神の化身ともされているからである。それらは神格が宿るご神体であり、それぞれの性格(踊ることが好き、気性が荒い、等)や履歴(どのご神木から切り出したものか、等)や固有の名前をもち、地元の人びとに大事にされている。

それらの対極である左、下、女、海は悪とされる。どちらか一方だけでは世界は成り立しない。両方がバランス良く存在することが大事なのだ。バロンは右に、ランダは左に属する。バロンとランダが登場するチャロナラン劇は、そのような善と悪、右と左の力のぶつかり合いと拮抗を演じるものである。魔物レヤックたちを束ねるランダは、世に恨みをもつた未亡人チャロナランの化身として登場する。他方バロンはそれと戦う王子が剣をもつて集団でランダに挑むが跳ね返され、今度はランダに向けていた剣を自身の胸に突き刺し始める。これはランダの力によるものである。しかし彼ら

ランダのご神体はラトゥ・アユ、「美しいお方」といった意の名でよばれていることが多い。この女神は、ご神体のバロンとともに村人を禍から守る神として、地元のさまざまな儀礼に参加する。僧侶はそのたびにその髪をとかし、花で飾り、供物を捧げてもいる。魔術を使って破壊をもたらすランダは、守り神でもあり、バリの人びとは畏怖しながらも愛着をもつて接する。ランダはバロンとともに共同体の中心において、人びとと深い絆を育んでいるのである。



上:チャロナランに魔術を学ぶ弟子シシアたち。劇の後半では、頭飾りを外し、髪の毛を振り乱しておどろおどろしい踊りを披露する
下:ランダに剣を突き立てようとする男たち。しかしランダによりその剣は跳ね返される
(ともにインドネシア バリ島、2019年)

の体が傷つくことはない。なぜなら彼らはバロンの力によつて守られているからだ。ランダとバロン、両者の拮抗する力に挟み撃ちにされた男たちの体は硬直し、ついに倒れる。これは予定どおりの「演技」だが、役者が実際にトランス状態に入ったり、失神したりすることも多々あり、演劇と現実の境が曖昧になる局面である。なお、ランダ役を演じるのは通常男性だ。

ランダはこのように恐ろしい存在として



右:聖獣バロン(H0276315)
左:魔女ランダ(H0276316)



寺院祭に出席すべく寺へ向かう守り神たち。村人は列をなしてお供する
(インドネシア バリ島、2023年)



イベントの詳細・予約はこちら

みんぱくホームページ
催し物のご案内
https://www.minpaku.ac.jp/event/



各イベントについて、
詳しくはホームページを
ご覧ください。

日本の仮面
——芸能と祭りの世界

国内各地では、仮面をつけた役者が登場する芸能や祭りがおこなわれてきました。本展示では、仮面と人びとの多様なかかわりについて紹介します。会期 3月28日(水)～6月11日(火) 会場 特別展示館



水俣病を伝える

熊本県の水俣市北地域では、水俣病の教訓を後世に伝えていく活動がおこなわれています。本展示では、こうした活動の意味と課題を考えます。会期 3月14日(水)～6月18日(火) 会場 本館企画展示場

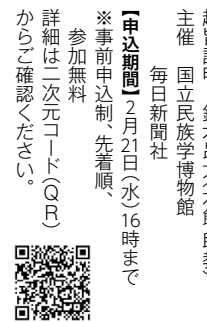


水俣市茂道漁港での水俣病センター相思社による水俣まち案内(2013年11月)

日本の仮面をつくる
——現代に生きる神楽面

面打ち師、特に日本各地の祭りや芸能で使われる仮面の制作者の存在はあまり知られていません。神楽面の制作を担う若手職人をお招きし、面づくりの現場に迫ります。日時 3月1日(金)18時30分～21時(17時30分開場) 会場 オーバルホール(大阪市北区梅田)(定員480名) 趣旨説明 鈴木昂太(本館助教) 主催 国立民族学博物館 毎日新聞社

「申込期間」2月21日(水)16時まで
※事前申込制、先着順、参加無料
詳細は二次元コード(QR)からご確認ください。



令和5年度文化庁長官表彰
を受賞

本館の広瀬浩二郎教授が、触文化(触る文化)を提唱し、視覚に頼らず、モノと触れ合うことでしか得られない情報の伝達について、博物館を舞台に先駆的な研究を展開していることで「文化庁長官表彰」を受賞しました。

みんぱくゼミナール

会場 みんぱくインテリジェントホール(講堂)
※定員400名
※事前申込制、先着順、参加無料
※当日参加受付あり(定員80名)

第542回 2月17日(土)13時30分～15時(13時開場)
地球と文明
——ホモ・サピエンス史からの展望
講師 池谷和信(本館 教授)

【申込期間】
▶一般受付 2月14日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第543回 3月16日(土)13時30分～15時(13時開場)
水俣病を伝える
講師 永野三智(一財)水俣病センター相思社 常務理事) 平井京之介(本館 教授)

みんぱくウィークエンド・サロン

会場 本館展示場(ナビひろば)、企画展示場など
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、要展示観覧券(イベント参加費は不要)

2月11日(日)14時30分～15時
デジタル化がもたらす社会の変化
——北欧ノルウェーを例に
話者 宮前知佐子(本館 助教)

2月25日(日)14時30分～15時
ベトナム西北部のフィールドワーク
話者 櫻永真佐夫(本館 教授)

3月10日(日)14時30分～15時15分
新規に加わったパキスタン資料をもう少しじっくり見たくする話
話者 吉岡乾(本館 准教授)

熊本県水俣市にある水俣病センター相思社では、水俣病歴史考証館を中心に、水俣病の教訓を後世に伝えていく活動をおこなっています。この活動を紹介したうえで、その意味と課題について考えてみたいと思います。

【申込期間】
▶友の会先行受付 2月9日(金)～16日(金)(定員80名)
【お申し込み先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
▶一般受付 2月19日(月)～3月13日(水)



水俣病歴史考証館(2020年)

関連イベント
ワークショップ
水俣の海を感じる
——語り部講話とシグナス体験

日時 3月30日(土)13時～15時50分(12時30分開場)
会場 本館展示場(本館2階第3セミナー室(定員18名))
講師 平井京之介(本館 教授)、吉永理(巴子)(一社)水俣病語り継ぐ会代表理事、吉永利夫(一社)水俣病を語り継ぐ会理事(中学生以上を推奨)

参加費 500円(大学生・一般の参加者は要展示観覧券)
※事前申込制(2月29日(木)まで、定員に達し次第受付終了)、先着順

作品一例

みんぱく映画会
みんぱく映像民族誌シアター

参加形式
①会場参加 シアターセブン(大阪・十三)各回定員55名
②オンライン(ライブ配信参加)各回定員1000名
※館外での開催です。ご注意ください。※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順、参加無料

「ジャワ島チルボンの木偶人形芝居」
——「ワヤン・コレック・チュバック」
日時 2月10日(土)14時～16時(13時30分開場)
解説 福岡正太(本館 助教) 司会 黒田賢治(本館 助教)

【申込期間】
▶一般受付 2月2日(金)まで
※友の会先行受付は終了しました。

「面打ち」——京都の能面師」
日時 2月18日(日)13時30分～16時(13時開場)
解説 吉田恵司(本館 館長) 司会 黒田賢治(本館 助教)

【申込期間】
▶一般受付 2月9日(金)まで
※友の会先行受付は終了しました。

みんぱくミュージアムパートナーズ(MPP)のワークショップ
日時 2月10日(土)、3月9日(土) 12時～15時30分(最終受付15時)
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

「過去・現在、そして未来」
——博物館における資料保存の過去・現在、そして未来

この半世紀の環境変化や技術の進歩により、博物館での資料保存の考え方や方法は変化してきました。国内外の資料保存を歴史的な観点からとらえなおし、今後の課題を考えます。

日時 2月10日(土)、11日(日) 10時20分(両日)9時45分開場
会場 みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員350名)

基調講演 森田恒之(本館名誉教授)
第一節 海外の博物館における文化財保存の潮流
第二節 日本博物館における文化財保存の潮流
第三節 博物館における文化財保存のこれから

言語 日英同時通訳あり

友の会

講演会・セミナーへの申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先 国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
E-mail minpakutomoto@senri-f.or.jp https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会講演会

参加形式
①本館第5セミナー室(定員90名)
②オンライン
友の会会員:無料
一般(会場参加のみ):500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第545回 2月3日(土)13時30分～15時
新たな知の創造に向けて
講師 宮前知佐子(本館 助教)

2023年7月のみんぱくゼミナールでは、文化遺産のもとへ向かい「デジタルドキュメンテーション」を実施する、情報工学研究者のフィールドワークを紹介しました。ドキュメンテーションされた、その後のデータはどのようなのでしょうか。本講演では、フィールドワー

クにまつわる小話や、フィールドワークの先にある研究について、お話しします。

第546回 3月2日(土)13時30分～15時
周縁から読み解く文明の形成
——神殿と文明のかかわりを探る
講師 松本雄一(本館 准教授)

アンデス文明の形成過程において、その「周縁」とされた地域の実態はこれまで謎に包まれていました。しかし近年の考古学調査の成果からは、まさにこの「周縁」が希少な財の流通に大きな役割を果たし、文明の形成に大きく寄与したことがわかってきました。一方で、それまであまり研究者が入らなかった「周縁」での調査には、思いもよらない難しさもあります。最新の調査成果を現地調査のこぼれ話(おもに失敗談)とともにお送りします。

東京講演会

友の会会員:無料、一般:500円
※事前申込制、先着順(定員50名)
※オンライン配信はありません。

第136回 3月23日(土)13時30分～15時
生まれかわりを信じるということ
——モンゴルの輪廻転生を巡る語りから

講師 島村一平(本館 教授)
会場 モンベル御徒町店4階サロン
現在、多くのモンゴル人はチベット仏教的な輪廻転生を信じています。人が亡くなると49日が過ぎると、黒子や痣を目印に転生者を探ります。本講演では、モンゴルの輪廻転生に関する普通の人びとの語りを紹介していきます。彼らの語りを通じて、転生が本当なのか、気持ちに揺れをもちながらも、人が死の悲しみを新たな生への喜びへと転換していく姿を描き出していきます。

主催 国立民族学博物館
共催 文化財保存修復学会

【申込期間】2月2日(金)17時まで
※事前申込制、先着順、参加無料
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます(定員500名)。
詳細は二次元コード(QR)からご確認ください。

お問い合わせ先
シンポジウム事務局
bunkazai@minpaku.ac.jp

過去・現在・未来
現在、
未来

みんぱく創設50周年記念
特別研究国際シンポジウム

ポストナショナルリズム時代の博物館
——少数/先住民文化展示の動向

少数/先住民文化の人たちとともに新たなナショナルリズムを構築するために博物館は何かができるでしょうか。みんぱくと世界の主要な博物館の動向を比較しながら考えます。

日時 2月25日(日)10時30分～17時(10時開場)
会場 本館2階第4セミナー室(定員60名)

言語 英語(日英同時通訳付き)
趣旨説明 鈴木紀(本館 教授) 主催 国立民族学博物館

【申込期間】2月21日(水)17時まで
※事前申込制、先着順、参加無料
事前申込は、メールにて受付いたします。
詳細は二次元コード(QR)からご確認ください。

マダガスカルの呪具ムハラ

飯田 卓 民博 教授

パナリヴになりたい！

マダガスカル島の西部から南部にかけての地域では、ウシ牧畜が盛んである。この地域では降水量が少なく、ツェツェバエがトリパノソーマ感染症を媒介してウシを大量死させることがない。このため人びとは、お金が貯まればウシを買って仔ウシを産ませる。そしてますます裕福になるというのが、この地域のサクセス・ストーリーである。ここでは裕福な者をパナリヴとよぶ。直訳すれば「千を持つ者」だが、要するに千頭（以上）のウシの所有者のことである。

そのウシの角で作られるのがムハラである。ムハラはウシの角に砂やさまざまな道具を詰めて呪具としたもので、呪医の施術によってなかの粉末に超自然的な力が与えられ、それを舐めたり、体に塗ったりすると災厄から逃れられるという。近代医療が普及する以前、

マダガスカルでは呪医とよばれる専門家が薬草を用いて病人を治療し、ト占や透視術によって災因を特定したり祓いの祈禱をおこなったりしていた。現在でも、近代医療で治癒しない病がある場合、人びとは呪医に相談して治療や除霊を試みる。ムハラは、クライアントと同じ人間である呪医が超自然の力を行使するうえで、なくてはならないアイテムなのである。

銃弾の雨のなか

今から15年以上前、マダガスカルのある博物館で、このムハラが展示されているのを見た。中央高地部のムラマンガにある国家憲兵隊博物館である。この町では20世紀半ば、フランスの植民地支配に抵抗する大規模蜂起が起こり、人びとはフランス軍を相手どって勇敢に戦った。そのときに、ムハラは民衆側の兵士を鼓舞した。真偽のほどはわからないが、ムハラの力を受けた兵士は、体に当たりそうになった銃弾を水滴に変えて難を逃れたという。

いっぽう、ムハラを悪用する者もいる。マラスまたはダハルとよばれる武装強盗団である。マラスは、ウシの多い豊かな地域を攻撃し、ウシだけを奪って逃げる（最近では殺人も犯す）。しかし猟銃で反撃される場合もあるので、ムハラで身を守っているという。ムハラはいわば「武器」である。



牛車は重要な輸送手段。去勢していないオスのウシは写真より角が巨大(マダガスカル、2014年)

呪医用 呪具

標本番号 | H0268852
地域 | マダガスカル共和国
展示場 | 非公開



◆ 推しコレポイント ◆

ウシの角に埋め込まれているのはハサミ。ムハラに埋め込まれた道具により、発揮される超自然的な力が異なる。ハサミの場合は遠くにあるモノの形を変える力を、貨幣の場合はモノの移動をうながす力を与えられるという。ぜひ、ひとつ手元に置いておきたい。



貨幣が埋め込まれたムハラ(マダガスカル、H0268854)

チルボン王国の聖人にまつわる人形芝居

ふくおかしょうた
福岡 正太 民博 教授

グアンジャティ王の魔法

ワヤン・ゴレック・チュパックは、ジャワ島西部北海岸の町チルボンとその周辺で演じられる木製の人形による芝居である。イスラーム神秘主義と結びついたチルボンの歴史物語をおもな題材としている。この地域にイスラームを広め、チルボン王国の基礎を築いたグアンジャティ王は、現在にいたるまでイスラーム九聖人の一人としてあがめられている。「みんぱく映像民族誌」第四九集に記録された上演は、そのチルボン王国にまつわる物語で、チルボンの西を流れるボンデット川の由来を描いている。

この物語に登場する人物の多くは不思議な力をもっている。例えば、聖なる地に運河を掘ろうとしたキ・タンパンラガと、グアンジャティ王にしたがうセ・マグルン・サクティ（パンゲラン・ソカ）は、たがいに魔法で怪物を出したり、狙撃手を出したりして戦う。ちなみに中東出身と伝えられるセ・マグルン・サクティは、伝説によれば、長い髪でまげ（マグルン）を結っていた。誰も彼の髪を切ることができなかったが、グアンジャティは指二本で簡単に髪を切ってしまった。そして彼はグアンジャティに仕えるようになった。

物語の続きを生きる

人形遣いマルタさんは、年に一回、代々の王の墓所前の広場で上演を奉納することを習慣としていた。その墓所で墓守を務めるのは、南インド出身の船乗りたちの子孫である。彼



「みんぱく映像民族誌」シリーズ第49集

「ジャワ島チルボンの木偶人形芝居——ワヤン・ゴレック・チュパック」

みんぱくの研究者がフィールドワークにもとづいて記録してきた映像作品を、「みんぱく映像民族誌」シリーズとしてDVD化。全国の大学や研究機関、図書館へ配付しています。また、館外開催のみんぱく映画会「みんぱく映像民族誌シアター」では、作品上映と監修者のトークをおこなっています。

らの祖先は、船が遭難したところをグアンジャティにより助けられた。それ以来、現在にいたるまで、彼らは一五人のグループを作り一五日間ずつ交代で、墓所で寝起きしながら墓を守り続けている。

グアンジャティは人知を超えたわざにより、多くの人をしがたがえていったことが他の多くの伝説にも語られている。チルボンの人びとにとって、それらは単なる物語のなかの出来事ではなく、今日の彼らの生活にもその影響をもち続けている。荒唐無稽にもみえるワヤン・ゴレック・チュパックの物語は、チルボンにイスラームを広めた人びとのおこないを伝え、畏敬の念をあらたにする機会ともなっているのだらう。



東南アジア展示場にある人形芝居ワヤン・ゴレック・チュパック用の木彫り人形
左がスナン・グアンジャティ(H0202184)
右がパンゲラン・ソカ(H0202190)

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

港町ラバウルの路線バス

ふかだ じゅんたろう
深田 淳太郎
三重大学 准教授

バブアニューギニア、ニューブリテン島北端の町のラバウル。静かで深い入り江に面した天然の良港を有するこの町は、ドイツの植民地下にあった一九世紀末から貿易港として栄え、商品作物を内陸のプランテーションから運び出すための道路網が早くから整備されてきた。太平洋戦争時にこの地を占領した日本軍も、山の上の飛行場に物資や人員を運ぶために道路を切り拓いた。「ビルマ道路」とよばれるその道は今も幹線道路として使われている。

こうして張り巡らされた道路網を走って、人びとの日常的な足となってきたのが路線バスである。ラバウルマーケットのバスターミナルでは、ハイエースなどのいわゆる商用バンに路線番号をペイント



かつては「南太平洋の真珠」とよばれた港町ラバウル

したバスが、朝から夕方までひっきりなしに人を乗せて出入りして

いる。時刻表もバス停も無いが、総合病院の近くにあるわたしが住んでいる村では一〇〜一五分も待つていれば一台は通りかかるし(勤務先の大学がある日本の地方都市よりもずっと本数が多い!)、手を挙げればどこでも停まってくれる。運賃も決まっていっぱったくりの心配も無い。村の人びとには皆それぞれ顔なじみの運転手がいいて、町でのちょっとした買い物やお使いを頼むこともできる。

そんな便利なバスだが、二〇二三年八月のある日、待てど暮らせどバスが来ない日があった。ようやく通りが



上:バス車内のようす。定員は15人だが、混雑時は20人以上が詰め込まれることも
下:乗客を待つバスの列
(写真はすべてバブアニューギニア、2023年)

かったバスも満員で停まってくれない。明らかにバスの稼働台数が足りていないようだ。一時間以上待つてようやく捉まえたバスで町に出ると原因がわかった。朝からラバウル港に大型クルーズ船が寄港していて、多くのバスが観光ツアーのために借り上げられていたのである。埠頭(ふと)に向かう通りはストリートマーケットになり、町全体がオーストラリア人観光客の落とす外貨で浮き足立っていた。

普段はバスのターミナルであるラバウルが、決してターミナル(終着点)ではなく、一九世紀から現在までずっと変わらずに外の世界との窓口であったこと、バスも道路もそこを通してどこまでもつながっていることを改めて考えさせられる一日だった。

На полуса подже, чом планировалась, я поехала к дому ... +998 9 ...

~ 10.30 Ozbek tili darsi
13.00 ~

Этот цитат или цитат теле (документ теле) ...

Аннан согу 53нче автобусе белли универ ...

19 сентября 2013.

Интервью проводились в основном на русском. ...

Ее отец - ... может разговаривать на татарском. ...

Автобусе телеграф ...



この日のフィールドノートには、バスの事故について小さく絵まで描いていた。走り書きのタタール語とロシア語で記述されているが、ときどき思い出したように日本語が単語単位で交じる(2013年9月19日)



タシュケントの旧市街をゆく黄緑色の市バス (ウズベキスタン、2023年)

出逢いは、いつも交通事故から

だって 調査だもの

タシュケントの衝撃

今思い出してもとんでもない衝撃だった。調査先に向かおうと市バスに乗っていたときのことだ。割り込んだ車避けきれずに、バスは電柱に勢いよく突っ込んだ。衝突し

たときの衝撃で、座席に座っていた乗客たちは通路に転げ落ちた。立っていた乗客たちは転んで折り重なっている。車内は阿鼻叫喚としかいようがない。わたしは一瞬星を見た気がした。

頭から血を流す人もいたくらい、大きな事故であった。しかし事故に慣れた乗客たちは驚くでも、誰かを責めるでもなく、次々とバスを降りていく。そして後続のバスに乗って足早に去っていった。

これはわたしウズベキスタンの首都タシュケントに留学していたときの話である。二〇一三年当時、明るい黄緑色が目印の市バスは、市内を移動するのにもっとも安価で便利な乗り物であった。なによりも、バス網は市内のあちこちに張り巡らさ

顧問 瑞希

中央学院大学 専任講師



タシュケント市民の車間距離は神技級の近さ (ウズベキスタン、2013年)



さて、冒頭の事故で、わたしは目に見える怪我がはなかった。問題は、手に持っていたタタール語の小さな辞書だ。車内で揉みくちゃにされて、

ばらばらになった辞書

ばらばらになってしまったのである。呆然としながらも、床に散乱した辞書のページをいそいそと集めるしかなかった。

そのとき「手伝うよ」と拾ってくれたひとりの乗客がいた。拾ったページを一瞥すると、「タタール語を知っているの?」とわたしに訊ねる。すこし恰幅のよいその女性は、市内のタタール人有志からなる伝統音楽サークルに所属しているという。二三〇万(当時)の人口を擁する大都会で、こんな偶然があるだろうか。わたしはタシュケントに暮らすタタール人のことばと社会に関心をもって調査をしていたので、いざそれはこうした有志団体も訪ねたいと思っていた。しかし、伝手がなかった



タシュケント地下鉄。なぜ地下鉄に乗らないのか? とよく言われる(ウズベキスタン、2023年)

たので、この出逢いは渡りに船だ。彼女とはしばらく立ち話をしてから連絡先を交換して、近いうちに会う約束をした。

ちなみに、一〇年経った今も彼女との付き合いは続いている。会うたびに、「あの出逢いは衝撃的だったよね」と思い出しても、げらげらと笑いあうのだ。

四度遭ったバスの事故

嘘のような本当のオチを付けるのであれば、わたしは留学中に似たようなバスの事故に四度も遭った。そ

のうち二度の事故で思いがけない出逢いがあった。一度目では車内ではばらばらになった辞書をきつかけに調査協力者と出逢い、三度目の事故では隣に座っていた人がタタール語を学ぶタタール出身の人で、これまた調査協力者となった。

何度も事故に遭ってにおいて、なぜほかでもなく市バスに乗り続けたかといえば、なによりも運賃が安かったからだ。しかし、それだけではなかった。導かれたような偶然の出逢いが続いていたので、それに期待していた面も否めない。

ときには運に身を委ねてみるのも、悪いことではないのかもしれない。だって調査だもの、計画どおりに進まないこともまたセオリーなのだ。

お腹も心も満たすボルデ

やまの かおり
山野 香織 ベーカリーボンボリーノ 代表

エチオピア西南部のとある農村に滞在していたある日、隣村での調査のため、村から数週間離れることになった。仲良くしていたダマネッチの家をあいさつに訪れると、しばしの別れを知って彼女は、ワンチャという土器でできた大きな杯を2つ取り出してきた。

「これを飲んでから行きなさい。体力がつくから」
彼女は自分の分とわたしの分のワンチャに、それぞれ溢れんばかりのボルデを注いだ。

ボルデは、エチオピア特有のテフという穀物、トウモロコシ、モロコシがおもな原料のローカルビールである。アルコール度数は低く、多少の酸味がある。どろどろとした醸造酒で腹持ちがよく、ときには食事として認識されている。村では定期市で飲まれることが多い。特に親しい女性同士が1つのコップで同時に飲み合う、「ダゴ」という特殊な飲み方もある。

ダマネッチが注いでくれたボルデを、3分の1飲んだところで少々ギブアップ。

「これ多いね」と言うと、「まだまだ」と言われる。

ようやく2分の1。「もうこんなにお腹がふくれた、もう限界だよ」と、自分のお腹をみせた。彼女は涼しい顔で、「残したら山道で倒れるかもしれないでしょ?」となかなか折れない。そんな彼女のワンチャにもまだまだボルデが残っている。「あなたも飲みなさいよ」と煽^{あお}ってみる。「わたしは飲んでるよ」と言い返される。

そんなやりとりをしているうちに、わたしはやっと飲み干した。

「ふう、飲んだ……」

こうしてダマネッチとのボルデをめぐる戦いは終わった。

「頑張ったね。日が暮れるから早く行きなさい。帰ってきたらまたうちに来なさいね」と、送り出してくれた。

たぶたぶになったお腹を抱え、険しい山道をゆっくり歩いた。傾斜が激しく息が切れそうになる。何度も立ち止まりそうになる。でも不思議と、いつもより元気かもしれない。ほろ酔いのせいで疲れが半減するかのようだ。

ダマネッチの優しさとボルデのあたたかさが身にしみる。

ボルデは親しい人とわかち合うもの。あるいは、人と人を親しくさせるものなのかもしれない。



ワンチャに注いでくれたボルデ。お腹いっぱい
(エチオピア 南部諸民族州コンタ特別郡、2006年)

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 島村一平 中川理 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間とおして、いつからでも始められます。



お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会

今月号の地図



編集後記

わたしにとってラバウルといえば、太平洋戦争中にそこで死まで命じられた水木しげるが描く戦記マンガの凄惨なイメージだった。だから深田淳太郎さんのエッセイを読んで、島内に張りめぐらされた道路網が世界にまで通じている平和な現状を知ると、なんだか安心した。かつて兵隊たちが見た地獄の景色は、現地の交通史に照らせばとくに遠景へと退いていたのである。

さて、今号の特集は「となりの魔女」。中世ヨーロッパでは地獄の悪魔の手下として、邪悪そのものであった魔女を取り巻く環境もまったく変わった。今では「魔女」は褒めことばにもなる(「悪魔」では難しい)。その背景には、近年のサブカルチャーやネット社会の拡大の影響が大きいのであった。

本号には現代の魔女さんたちにも登場していただいている。無償で協力してくださったその神(?) 対応に、「魔女さん、ありがとう!」

あ、中世ヨーロッパでこんなこと公言したら、ひどい目にあわされたことだろう。(樫永真佐夫)



次号の予告 3月号

特集「負の歴史を伝える」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

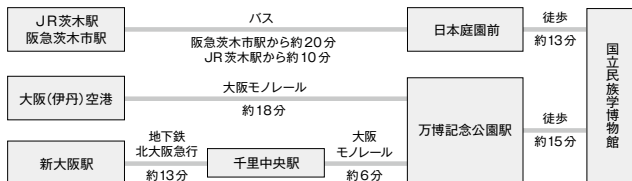
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日~1月4日)

観覧料 一般 580円/大学生 250円/高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



みんぱく創設50周年募金(寄附金)のお願い

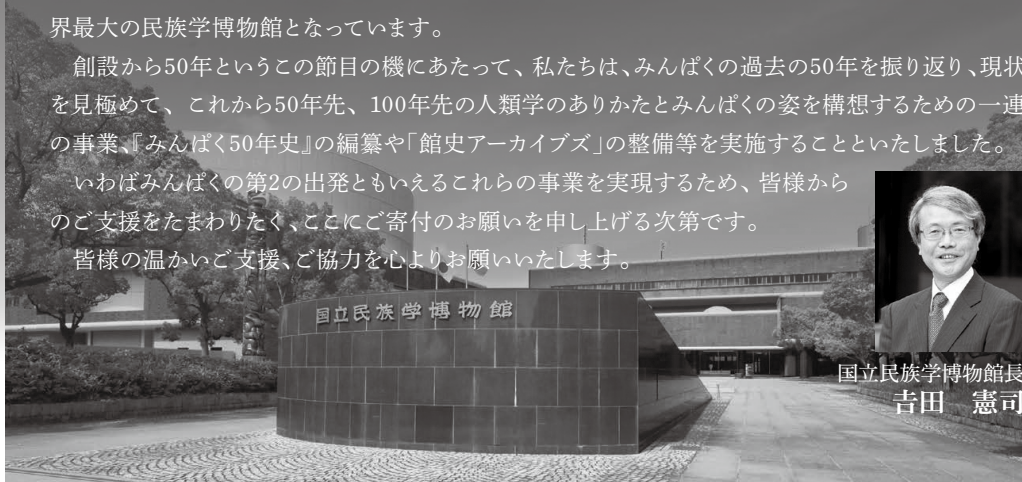
国立民族学博物館(みんぱく)は、2024(令和6)年に、創設50周年を迎えます。

みんぱくは、文化人類学関係の教育研究機関として、世界全域をカバーする研究者の陣容と研究組織、博物館機能を備える世界で唯一の存在であると同時に、その施設の規模の上で、現在、世界最大の民族学博物館となっています。

創設から50年というこの節目の機にあたって、私たちは、みんぱくの過去の50年を振り返り、現状を見極めて、これから50年先、100年先の人類学のありかたとみんぱくの姿を構想するための一連の事業『みんぱく50年史』の編纂や「館史アーカイブズ」の整備等を実施することといたしました。

いわばみんぱくの第2の出発ともいえるこれらの事業を実現するため、皆様からのご支援をたまりたく、ここにご寄付のお願いを申し上げる次第です。

皆様の温かいご支援、ご協力を心よりお願いいたします。



国立民族学博物館長
吉田 憲司



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology



詳しくは創設50周年記念特別サイトまで▼

国立民族学博物館友の会機関誌『季刊民族学』のご案内



表紙「ハグ—友情と幸福、孤独の終わり」
写真:ジュニオール・マエダ(写真家)

A4判・104頁 2024年1月31日刊行

最新号

『季刊民族学』187号
ISBN 978-4-915606-89-2 C0436

【特集】

境界をゆきかう 日系人

国や文化、民族の境界に生き、境界をゆきかう日系人の多様な姿とおして、異文化共生社会のあり方を考える。

中牧 弘允/小嶋 茂/根川 幸男/山本 見輔
ジュニオール・マエダ/アンジェロ・イシ
城田 愛/河上 幸子/早稲田 みな子
佃 陽子/伊藤 雅俊/菅瀬 晶子

連載 フィールドワーカーの布語り、モノがたり 第5回
台湾先住民セデックと三つの織り機

田本 はる菜
ほか



『季刊民族学』186号
ISBN 978-4-915606-88-5

【特集】

争いの終わらせ方 —紛争解決と共生の人類学

人はなぜ争うのか。
世界各地で発生している紛争や深刻な人権侵害に目を向け、紛争を回避する仕組みや共生について考える。

藤井 真一/松田 素二/橋本 栄莉
細谷 広美/石田 智恵/井上 浩子
石井 正子/長 有紀枝/酒井 朋子

ほか

185号 ISBN 978-4-915606-87-8

【特集】ビーズ大陸 アフリカ

184号 ISBN 978-4-915606-86-1

【特集】カラダの人類学—身体という秘境を旅する

183号 ISBN 978-4-915606-84-7

【特集】民藝—人とモノが出会うとき

講読方法

国立民族学博物館友の会の維持会員、正会員のみなさまには、年間4冊お届けしております。

おためし購入は一般価格:2,750円(税込)、会員価格:2,200円(税込)。郵送の場合は別途発送手数料をご負担ください(会員は不要)。

『季刊民族学』は国立民族学博物館ミュージアム・ショップで販売しております。

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

オンラインショップ「World Wide Bazaar」

<https://www.senri-f.or.jp/shop/>

E-mail shop@senri-f.or.jp



オンラインショップ

国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)

電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp



友の会